

音楽・美術の実演と創作を介した異校種間交流

「第2回 サマーチャレンジ! スクスクール『アートであそぼう!』」での実践を通して

梶原 彰人・三ツ石 行宏・阿部 鉄太郎・玉瀬 友美・川俣 美砂子

(人文社会科学系教育学部門)

Cultural exchange between schools of different types via the demonstration and creation of music and art:

-The practice of the educational program

"Summer Challenge! Sch-School 'Let's Play with Art'"-

Akito Kajiwara, Yukihiro Mitsuishi, Tetsutaro Abe, Yumi Tamase, Misako Kawamata
(Kochi University Research and Education Faculty, Humanities and Social Science Cluster, Education Unit)

要 約

本研究は、平成29年8月に開催された高知大学教育学部主催事業「第2回 サマーチャレンジ スクスクール☆2017」における音楽の実演、美術における創作、それらを含む幼児教育を柱とした実践を通して、小学校、中学校、高校、大学の4つの校種をまたぐ文化的交流を図る試みである。事業の対象は小学生であり、本活動は、音楽・美術活動やレクリエーションを通して参加児童に新しい感性との出会いを提供する場であるが、そこに地域の中学、高校、そして大学が関わることにより異校種間でどのような交流が行われるか検証し、それぞれの活動に携わった大学教員の視点により考察する。

キーワード：音楽、美術、幼小連携、異校種間交流

1. 実践に至る経緯

まず、本研究の実践に至る経緯について述べる。平成28年8月、高知県立山田高等学校（以下、山田高校とする）地域協働本部主催にて、「山田高校 第1回 サマーチャレンジ スクスクール☆ in おおみや2016」（以下、第1回とする）が開催された。本稿における「サマーチャレンジ スクスクール」とは、夏休みを利用した小学生対象の体験学習教室である。「第1回」の実施では、香美市立大宮小学校において、「ベタングにチャレンジ」のほか、「英語にチャレンジ」、「お料理づくりにチャレンジ」、「ハンドベルにチャレンジ」など、14項目の「チャレンジ」のコーナーが設置され、高知大学教育学部（以下、本学部とする）においては、山田高校生徒有志と本学部幼児教育コースの教員・学生有志が「あそぼーや」（後の「出張『あそぼーや』」であるため、以下「出張『あそぼーや』」^(註1)とする）を、山田高校吹奏楽部員と本学部音楽教育コース教員が「楽器にチャレンジ」を担当した。「出張『あそぼーや』」と「楽器にチャレンジ」は、教員同士での情報共有は多少はあったものの、別日程でそれぞれ単体での実施であった。

「第1回」における「出張『あそぼーや』」では、「プラバン」、「ビニール袋パラシュート」、「ペットボトルけん玉」、「スーパーボール作り」の4つの製作コーナーと、「伝言ゲーム」、「猛獣狩りに行くよ」、「バースデーライン」の3つのレクリエーションを用意した。

「楽器にチャレンジ」は、本学部音楽教育コース教員による管楽器の簡単な説明（由来や素材、発音の仕組みなど）と高校生らによる各楽器の実演、ブラインド越しに演奏して音色によって楽器

を当てる「音あてクイズ」、小休憩ののち、高校生らのアドバイスをを受けながらそれぞれの楽器を試奏する「いろいろな音のでるものを吹いてみよう」という内容であった。また、当日夕方には、山田高校吹奏楽部に、香北町所在の香美市立香北中学校（以下、香北中学校とする）吹奏楽部、本学部芸術文化コース、音楽教育コースの学生有志も加わり、総勢約40名の合同吹奏楽コンサート「一番星コンサート」を開催した。このコンサートでは、別日程の「ハンドベルにチャレンジ」に取り組んだ児童たちの演奏があり、また「楽器にチャレンジ」に参加した児童らの数名が一般聴衆として参加した。

「第1回」を終え、参加児童、その保護者、コンサートの聴衆などから、口頭ではあるが、“楽しかった”“とても素晴らしかった”“来年もやってほしい”など、多くの高評価をうけ、主催側からも“ぜひ来年も協力してほしい”という依頼を受けていた。その後、諸般の事情により山田高校地域協働本部での主催が難しくなったが、香美市内小学校の保護者より“今年は高知大学の音楽と「出張『あそぼーや』」の主催でお願いできないか”との相談を受け、本学部主催事業である「第2回 サマーチャレンジ スクスクール ☆ 2017」の開催に至った。

2. 実践の概要と研究の目的

「第2回 サマーチャレンジ スクスクール ☆ 2017」（以下、第2回とする）は、高知県香美市の小学生を対象に募集を行い、以下のように実施した。また、一般向けの吹奏楽演奏会である「一番星コンサート」を同時開催した。なお、本稿における実践研究は「第2回」の「楽器にチャレンジ!」、 「出張『あそぼーや』」、及び平成29年開催の「一番星コンサート」（出演のボディパーカッション含む）の3点とする。

次に、本研究の目的について述べる。まず、先行的实践である「第1回」の考察により以下のよ

表1 「第2回」概要

日程：平成29年8月17日～18日		対象：香美市内小学生（事前申し込み）	
場所：保健福祉センター香北（高知県香美市）			
日 時	企画タイトル	概 要	
8月17日(木) 10:00～11:30	楽器にチャレンジ!	①管楽器についての紹介 ②簡易トランペットの製作 ③各楽器の試奏	
8月18日(金) 10:00～11:30	出張「あそぼーや」	<製作活動> <ul style="list-style-type: none"> ・ペットボトルけん玉 ・万華鏡 ・ストロー飛行機 ・モールを用いた創作活動 <ゲーム活動> <ul style="list-style-type: none"> ・そーれで仲間作り ・フルーツバスケット（なんでもバスケット） ・椅子取りゲーム 	
8月18日(金) 13:00～15:00 (ボディパーカッション)	浴衣 de ボディパーカッション!	・ボディパーカッションの体験と「一番星コンサート」への出演	
17:00～18:00 (一番星コンサート)	※外部講師による		

表2 「一番星コンサート」概要

日程：平成29年8月17日～18日		場所：保健福祉センター香北（高知県香美市）		対象：一般	
日	時 間		概 要		
8月17日(木)	10:00～12:00	13:00～16:00	打楽器搬入・セッティング	合同リハーサル	
8月18日(金)	13:00～16:00	17:00～18:00	合同リハーサル	本番	
本番会場エントランスにて、「出張『あそぼーや』」で制作したモールの作品を、天の河に見立てて展示した。					

うにブラッシュアップを行った。

「楽器にチャレンジ！」においては、「第1回」では各楽器の実演は高校生であったため、奏者（生徒）によって演奏技術の習得にばらつきが見られた。本学部には、芸術文化コース、音楽教育コース（以下、両コース合わせて音楽系コースとする）があり、器楽研究室（管楽器）に在籍する学生は、管楽器の奏法や表現を専門的に学んでいる。そこで、「第2回」においてはより本質的な音色を参加児童に聴かせるために各楽器の実演担当を本学部音楽系コース及び賛助学生とした。また「第1回」では、参加児童は楽器の試奏をその場で体験するだけであったが、自分で音を出す喜びを家庭やそれぞれの学校で再現できるよう、「第2回」では身近なものを用いて、持ち帰りの可能な簡易トランペットを製作した。さらに各楽器の試奏の際には、指導者的立場で大学生と連携を図るため、山田高校吹奏楽部員を大学生の補佐とした。

本実践における「出張『あそぼーや』」については、「第1回」より幼児教育コースの主導により【幼児教育コースの学生が学外に赴き、地域の小学生との遊びを通して子育て支援を行うこと】また、【幼小連携について学ぶ実践の場とすること】を目的として実施されている。「出張『あそぼーや』」における活動は大きく分けて「おもちゃの製作」と「皆で楽しめるゲーム」であるが、「第2回」では手順の確立された「製作」の活動の中に、本学部美術教育コース教員監修のもと、個人の自由な表現が可能である「モールを使った創作」活動のコーナーを設けた。「製作」活動に「美術的観点からの創作」活動を盛り込むことによって、【参加児童の能動的なひらめきや創造性、独創性を養うこと】を目的として加えた。

「一番星コンサート」においては、「第1回」では前述のとおり、山田高校吹奏楽部、香北中学校吹奏楽部、及び本学部音楽系コース学生有志であった。「第2回」では音楽を通じた中学⇄高校⇄大学の生徒・学生の交流の規模を拡大し、山田高校吹奏楽部、本学部学生及び賛助学生有志のほか、香美市立中学校全3校（大栃中学校、鏡野中学校、香北中学校）の吹奏楽合同コンサートとした。また、「第1回」では児童参加企画は「ハンドベル」であったが、「第2回」では対象を中高学年とし「ボディパーカッション」とした。さらに、「出張『あそぼーや』」とのアートを介したコラボレーションとして、モールで創作した立体造形物をそれぞれの一番星に見立ててエントランスに展示する、「一番星の天の河」を新たに企画した。

以上により、本実践を通しての目的を【芸術（音楽・美術）と幼児教育分野の幼小連携を通じて、小、中、高、大の4つの校種間をまたぐ文化的交流】、及び前述の【参加児童の能動的なひらめきや創造性、独創性を養うこと】とした。

3. それぞれの実践研究を通して

本項では、実践研究3点の詳細な活動内容とその考察について、「楽器にチャレンジ！」と「一番星コンサート」については芸術文化コース・音楽教育コース、「出張『あそぼーや』」については幼児教育コース・美術教育コース、それぞれの観点から述べる。

3-1. 「楽器にチャレンジ！」

3-1-1. 当日の流れ

「楽器にチャレンジ！」は、参加児童8名（内訳：小学1年生1名、2年生6名、4年生1名）を対象に、①管楽器の紹介、②簡易トランペットの製作、③各楽器の試奏、の3つの活動に以下の小題を設定し、それぞれ小休憩をとりながら各30分ずつ、10時～11時30分の計90分の実践であった。

①管楽器の紹介「どんな楽器があるかな？」

このコーナーでは、吹奏楽で主に使用される楽器のうち、フルート、オーボエ、クラリネット、サクソフォン、ホルン、トランペット、トロンボーン、テューバについて、素材、由来、発音方法などを本学部音楽教育コース教員が簡単に説明しながら、大学生（テューバのみ他学部学生の賛助）

の演奏によって各楽器の音色を聴かせた。特に、外見が似ているが発音の仕組みが違うオーボエとクラリネット、発音の仕組みが同じであるが本体の素材や形状が違うクラリネットとサクソフォン、発音体が同じ（唇による振動）であるが楽器の形状がそれぞれ違う金管楽器（ホルン、トランペット、トロンボーン、チューバ）を聴き比べるなど、音色の違いについて印象に残るように工夫した。

②簡易トランペットの製作「身近なものを使って楽器を作ろう」（写真1）

このコーナーでは、ホースとクリアファイルを用いて簡易的なトランペットを製作した。製作に必要な材料は、ホース、クリアファイル、粘着テープ、ビニール紐であり、これに加えてプラスチック製のマウスピースを配布した。製作手順は、i. クリアファイルを丸めて円錐状の筒を作り筒の細い方をホースの外径に合わせて粘着テープで止める、ii. ホースを丸めて楕円形を作る、iii. ホースをビニール紐で固定し、適宜粘着テープで固定して完成させる、である。時間が限られていること、また安全面を考慮し、ホースは参加児童分を予め切り分けて持参した。ホースの長さは約120cmとした。これは、試作の際に試奏し、おおよそ468HzのB₁を奏することができるようにホースの長さを調整したものである。完成後、①で説明した金管楽器の奏法（唇の振動）を、金管楽器担当の学生が中心となって参加児童に指導し、参加児童は自作した簡易トランペットを実際に演奏した。



写真1

③各楽器の試奏「色々な楽器を吹いてみよう」

このコーナーでは、①で紹介したそれぞれの楽器を担当する大学生と補佐である高校生が音を出す技術指導を行い、参加児童が実際に楽器を演奏した。

3-1-2. 「楽器にチャレンジ!」に関する考察

特に印象深かった②～③の活動について、児童、高校生、大学生の動きからの考察を述べる。②では、児童たちからは「持って帰れるの、うれしい」などの歓声があがった。製作手順は前述の通りであり、大学生にとっては簡単で、児童たちへの手順説明でコツをつかみすぐに製作指導や補助にあたった。一方児童たちにとってはクリアファイルの丸め方やビニール紐で固定する際の形作りなどで苦戦する場面もあったが、大学生のアドバイスなどから彼らなりの簡易トランペットを製作した。①の活動では、大学生は演奏者であり、大学生⇒児童という関係性であったが、②の製作活動によって直接言葉をかわし、一緒に製作することで、大学生⇄児童の交流を図ることができた。また、児童たちは簡易トランペットの演奏法について、非常に短時間で（児童によってはほとんどすぐに）習得していた。筆者は、これまでに小中学生の金管楽器初心者に数多く接してきた経験から金管楽器の発音（唇の振動）の習得にはある程度時間がかかるものと考えていたので、この結果は興味深く、簡易トランペットについて教材としての可能性を感じた。③の活動では高校生が大学生の補佐として加わった。基本的には吹奏楽部で担当している楽器の補佐であったが、大学生の担当が不在であるトロンボーン（①の際は筆者が演奏した）のコーナーには、他の楽器の高校生が自発的にトロンボーンの高校生を補佐するなど、高校生の柔軟な対応が随所で見受けられた。児童たちは思い思いに様々な楽器を試奏したが、最終的には自身が製作した簡易トランペットを演奏していた。簡易トランペットが演奏しやすいからなのか、自身が製作した楽器だからなのか、今後さらに研究を深めたい課題である。（梶原）

3-2. 「出張『あそぼーや』」

本学部幼児教育コース所属の学生（以下、幼児教育コース生）が実践した、「出張『あそぼーや』」について時系列に沿って、その活動内容について示す。また、「出張『あそぼーや』」の準備段階か

ら、指導・助言をおこなってきた幼児教育コース所属教員の視点から、今回の活動を通して、幼児教育コース生が得られた成果について考察を加える。

3-2-1. 当日の流れ

今回、「出張『あそぼーや』」に参加した幼児教育コース生は大学1年8名・大学2年7名の計15名であった。2年生の幼児教育コース生はその大半が、昨年の夏に香美市立大宮小で実施された「出張『あそぼーや』」に参加した。つまり、その学生たちは2回目の「出張『あそぼーや』」の参加となる。その他、幼児教育コース所属の教員も3名全員参加し、また美術教育コースからも教員が1名参加し、幼児教育コース生の活動を見守った。

「出張『あそぼーや』」それ自体は、朝10時開始、11時半終了のプログラムである。「出張『あそぼーや』」の前半(10時~10時50分)は、それぞれ4つのコーナーを設けての製作活動となった。すなわち、モール、ペットボトルけん玉、万華鏡、ストロー飛行機という4つの製作活動である。「出張『あそぼーや』」の後半(10時50分~11時30分)は、「そーれで仲間づくり」「フルーツバスケット(なんでもバスケット)」「椅子取りゲーム」という3つのゲームを実施した。ちなみに、「出張『あそぼーや』」に参加した子どもたちは、10名であった。内訳は次のとおりである。すなわち、小学2年が7名(男子3名、女子4名)、小学3年が1名(女子)、小学4年が1名(女子)、小学6年が1名(女子)であった。

「出張『あそぼーや』」それ自体は午前で終了したが、幼児教育コース生は午後からの「一番星コンサート」にも参加した。その他にも、モールの飾りつけや「一番星コンサート」の会場受付の補助なども行った。

3-2-2. 製作活動〔「出張『あそぼーや』」の前半(10時~10時50分)〕

製作活動では、ペットボトルけん玉、万華鏡、ストロー飛行機の3つの製作コーナーと、モールを用いて自由に創作するコーナーが設けられた。ペットボトルけん玉、万華鏡、ストロー飛行機に関しては、どのようなものを小学生の子どもたちが製作したか、幼児教育コース生による作り方の説明(幼児教育コース生の間で、共有していた作り方)を通して、以下に示したい。

- ・ペットボトルけん玉 … ペットボトル(500ml)上部3分の1を切る(切り口は、ケガ防止のため、ビニールテープを貼っておく)。それを2つ事前に用意しておく。その2つを飲み口側どうしでビニールテープを使ってくっつける。1本の糸を用意し、その片側をペットボトルのキャップにくっつける。もう片側は先ほどのペットボトル(3分の1の大きさで切って、2つくっつけたもの)にテープでくっつける。
- ・万華鏡 … 長さ20cm程度のプラスチック板を3枚、事前に用意しておく。そのプラスチック板3枚を三角錐になるようにくっつける。その三角錐の両端にビー玉を半分程度入れ、両面テープで固定する。その三角錐を画用紙(何枚か色の種類有。その中から選択可能)でくるむ。
- ・ストロー飛行機 … ストロー2本と細長く切った紙を2つ、事前に用意しておく。その細長く切った紙で輪をつくる。ストローを2つ並べ、その両端に、細長く切った紙で作った輪をくっつける。



写真2(ペットボトルけん玉)



写真3(万華鏡)



写真4(ストロー飛行機)

幼児教育コース生は、子どもたちに対し、モール、ペットボトルけん玉、万華鏡、ストロー飛行機の作り方・遊び方を説明したり、それらを使って遊ぶ子どもたちに対してサポートした。(三ツ石、玉瀬、川俣)

・モールを用いた自由な創作活動

モールとは、心材が柔らかな針金でできており、そのまわりに化学繊維(複数の色がある)が羽毛上に施された工作素材である。今回使用したモールは、心材の長さ25cm、化学繊維の長さ9mmで、色は15種類(白、黄、黄緑、水色、青、オレンジ、紫、ピンク、赤、黒、赤ラメ、ピンクラメ、青ラメ、金、銀)である。各種100本ずつの、計1500本のモールを用意した。

モールは、初期形態は棒状であり、子どもの力でも容易に曲げたり、折ったり、結んだり、つないだり、切ったり、編んだりすることができる、幼児の立体造形に適した工作素材である。造形行為が類似する工作素材として粘土が挙げられるが、モールは粘土と違い作業場所を汚しにくい利点がある。今回の「出張『あそぼーや』」の会場は、精密機材のあるコンサートホールであるため、チリや埃が出にくいモールを使用することが最良の選択と考えた。

コーナーの環境づくりであるが、子ども達が好きな色のモールを存分に使えるよう、1500本全てのモールを色ごとに整理してテーブル上に敷き詰めた(写真5)。子どもがモールを選ぶ際の「選択の幅」を広げることを今回は重視した。自分の好きな色のモールを複数選択し、組み合わせて、構造的な立体造形物をつくって遊ぶことが、今回のモール遊びの主軸であるためである。遊びの導入であるが、事前に大学生がいくつかの見本を作っておき、それを子ども達に示すことで、モールで可能な造形行為が想像できるように工夫した。具体的には、曲げる、折る、結ぶ、つなぐ、切る、編む、という造形行為により生まれる形を見本として事前に示すことで、子ども達の能動的な造形行為を引き出すきっかけをつくった。

次に、大学生の造形遊びの支援の様子について報告する。大学生はモール遊びのコーナーへ子ども達を誘い、テーブル全面に敷き詰められた大量のモールを前に、子ども達と共に驚きの感情を共有した。その後、子ども達に好きな色のモールを複数選択させ、それらをトルネード状に曲げて編み込み、しま模様の棒を成形する方法を教えた。しま模様の棒ができた後、それをハートや星や花の形に曲げ(折り・つなぎ・切り)、出来上がった立体造形物をお互いに見せ合いながら、造形遊びの楽しさを共有した。子ども達で作った立体造形物は、コンサートホール外のロビーに展示し、「一番星コンサート」とのコラボレーションをはかる意図があったため、子どもから展示の同意が得られた立体造形物については随時展示していった(写真6)。

モール遊びのコーナーで遊んだ子どもは女兒が多く、男児の反応は少ない結果となった。コンサートとコラボレーションする作品展示ができるよう、星やハートなど、展示する上で効果的な形を期待し、あるいは誘う指導を行ったが、実際はプレスレットや髪飾りなど、実際に子ども達が身に着けることのできるものを造形する傾向が強く、そちらの方が反応も良かった。子どもの傾向とモールの特性との関係性をさらに考察し、教材研究を進める必要があると感じた。(阿部)

3-2-3. ゲーム活動(「出張『あそぼーや』」の後半[10時50分~11時30分])

「出張『あそぼーや』」の後半(10時50分~11時30分)では、以下3つのゲームを実施した。すなわち、「そーれで仲間づくり」「フルーツバスケット(なんでもバスケット)」「椅子取りゲーム」で



写真5



写真6

ある。「そーれで仲間づくり」は、進行役の幼児教育コース生の拍手の数だけ、周りにいる子どもたちとグループになるというゲームである。たとえば、ゲーム進行役の幼児教育コース生が3回拍手したら、子どもたちは自分を含め3人の子どもたちとグループにならないといけない。「フルーツバスケット（なんでもバスケット）」および「椅子取りゲーム」に関しては、一般的に知られたゲームであると考えられるため、ここでの説明は省略する。ただ「椅子取りゲーム」で流す音楽は、音楽教育コース所属教員と音楽教育コース所属の学生による吹奏楽の生演奏という非常に贅沢なものとなった。

幼児教育コース生は、子どもたちに対し、「そーれで仲間づくり」「フルーツバスケット（なんでもバスケット）」「椅子取りゲーム」のルールを説明したり、それらゲームの進行役を担当したり、司会進行ではない学生は実際にゲームに参加し子どもたちの遊びをサポートした。（三ツ石、玉瀬、川俣）

3-2-4. 「出張『あそぼーや』」に関する考察

「出張『あそぼーや』」の準備段階から、指導・助言をおこなってきた幼児教育コース所属教員の視点から、今回の活動を通して、幼児教育コース生が得られた成果について考察を加える。その成果は、大きくは次の3つに集約されると考えられる。

1つ目は、遊び支援をできる子どもたちの年齢に幅ができたことである。ふだん高知大学内で行う「あそぼーや」は乳幼児のみを対象としている。しかし、今回の「出張『あそぼーや』」の対象は小学生のみであり、乳幼児は対象外であった。そのため、製作やゲームも、幼児教育コース生はその作り方やルール説明も含めて工夫し、小学生でも楽しめるように実践した。

2つ目は、臨機応変な対応力が育まれたことである。今回の「出張『あそぼーや』」は、活動当日にならないと、参加する子どもの数の詳細がわからなかった。事前に想定していた子どもの数と異なったため、幼児教育コース生は急遽ゲームを変更した。代わりに別のゲームを実施したが、それは参加した子どもたちが“楽しかった”という感想をもらすほどの出来であった。

3つ目は、手本となる先輩から実際に学べたことである。学内で行う「あそぼーや」を含め、幼児教育コース1・2年生が合同で活動を行う機会はめったにない。そのため、1年生にとっては、先輩である2年生の動きを実際に目にして学ぶことのできる非常によい機会となった。

「出張『あそぼーや』」を通して、幼児教育コース生はその対応力に幅と深みが増えたと思われる。（三ツ石）

3-3. 「一番星コンサート」

3-3-1. 当日の流れ

8月17日（木）10時より打楽器搬入と椅子・譜面台のセッティングを行った。合同リハーサルは同日13時～16時と18日（金）13時～16時の2回であった。5校合同の吹奏楽は80名を越える大所帯となったが、リハーサルは各学校の吹奏楽部顧問教員によって滞りなく進められ、本番を迎えた。本番では、200名の一般聴衆を迎え、「ボディパーカッション」に参加した児童と賛助出演の幼児教育コース生によるパフォーマンスから始まり、楽器紹介、幼児教育コース生とのダンスコラボ、聴衆の歌唱参加など、盛りだくさんの1時間となった。

3-3-2. 「一番星コンサート」に関する考察

今回の合同コンサートは、曲目の練習は各学校で行っていたが、実際に5校がそろって顔を合わせるのも合同でリハーサルを行うのも8月17日（木）が初めてであった。17日10時からのセッティングの時間におおよその椅子は並べることができたが、細かい配置は全員揃わないと決定できない。17日13時のリハーサルではまず、管楽器担当の中高生、大学生は椅子の細かいセッティングを、打楽器担当の中高生はパートの振り分けを行った。初対面も少なからずいたはずであるが、高校生が中心となり各所においてスムーズに作業を終えていた。特に指示は出していないが、休憩中には

パートによっては高校生が中心となって分奏（パートやセクションで合わせる練習）を行ったり、中学生に指使いを教えたりするなど、全体としては高校生がよく動き、大学生はその補佐をする、という印象であったことが興味深い。

また、本番では「ボディパーカッションにチャレンジ！」の参加児童はもちろん、「楽器にチャレンジ！」や「出張『あそぼーや』」に参加した児童の中からも数名が聴衆として加わり、楽器紹介の際に積極的に手を挙げて発言したり、エントランスの展示を見て「これわたしの！」や「これはあの人！」と発言したりするなど、小学生が音楽・美術、そして幼小連携の取り組みを介してコンサートを作る側への参加も果たしていた。（梶原）

4. まとめ

本稿では、「第2回」の実践研究における児童、中高生、大学生らの動きや感想を含む発言などから、【芸術（音楽・美術）と幼児教育分野の幼小連携を通じて、小、中、高、大の4つの校種間をまたぐ文化的交流】、及び【参加児童の能動的なひらめきや創造性、独創性を養うこと】という目的について、音楽、美術、幼児教育それぞれの観点から考察を行った。目的の達成についてはある一定の成果があったと考えられるが、それぞれの分野において新たな課題や研究材料も見つかった。また、「第1回」、「第2回」を経験して、このような取り組みは参加児童にとって継続的に進んでいくことが重要であると感じた。そのためには、地方における知の拠点のひとつである大学と、地域住民との連携強化が必要不可欠であり、地域協働と教育の浸透を兼ね備えた組織作りが今後の大きな課題の一つであろう。

謝辞

本実践研究を実施するにあたり、高知大学教育学部長裁量経費の助成を受けた。また、本事業の実施にあたり、香美市立各中学校及び山田高校の生徒、教諭、保護者の皆様に多大なるご理解とご協力を賜った。とくに父田由美先生（山田高校）、幾井留奈先生（香北中学校）、弘田靖明先生（大栃中学校）、深川益也先生（鏡野中学校）、には、演奏会のコーディネーターや演奏指導、指揮などにおいて、校種、校区をまたいで熱心にご協力頂いた。さらに、ボディパーカッションの外部講師をご担当頂いた植田葉子氏には、運営面においても多くのご助言を頂いた。ここに心より感謝の意を表する。

参考文献・URL

・家庭・地域との連携及び校種間の連携－文部科学省

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/024/report/attach/1370617.htm

（2017年10月17日参照）

^(註1) 「出張『あそぼーや』」は、「あそぼーや」から派生した活動である（「出張『あそぼーや』」の開始は2016年2月からであり、「あそぼーや」は2015年5月開始）。「あそぼーや」とは、幼児教育コース生が、教育学部教員の指導のもと、地域の乳幼児へ遊び支援などを行う地域子育て支援活動のことである。「あそぼーや」は高知大学朝倉キャンパス内にある教育学部棟で実施している。一方、「出張『あそぼーや』」とは、高知大学朝倉キャンパスではなく、学外に赴いて、幼児教育コース生が、教育学部教員の指導のもと、その地域の子どもたちへ遊び支援などを行う地域子育て支援活動を意味する。「出張『あそぼーや』」に参加する子どもたちは、乳幼児に限らない。現に今回参加した子どもたちは全員小学生であった。なお、「出張『あそぼーや』」に参加・活動する幼児教育コース生は、今回の活動も含め、今のところ全員、大学1・2年生である。